

3 月 期

〈出典一覧〉

国語 隈研吾 『ひとの住処 1964－2020』一部改変
国語 山崎正和 『日本文化と個人主義』一部改変

新潮新書
中央公論社

問2 次の文の空欄 ・ にはいるものを、それぞれア～オの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は | |

慣用句「の尾を踏む」

- ア 猫
- イ 虎
- ウ とかけ
- エ 犬
- オ 雉

「一意専心」の類義語は である。

- ア 一衣帯水
- イ 誠心誠意
- ウ 心機一転
- エ 一心不乱
- オ 首尾一貫

問 5 空欄 Y にはいる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 19

- ア さらし イ しかし ウ いうまでもなく エ もちろん オ なにしる

問 6 ⁴ かわめて怠惰な精神の安楽さ とあるが、この「怠惰」とはどのようなことか、三十文字以内で説明しなさい。解答番号は 20

問 7 ⁵ 手をつかねて とあるが、これと類義的な語句はどれか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 21

- ア 手をつかねて イ 手をこまねいて ウ 手を入れずに エ 手を染めずに オ 手を煩わせずに

問 8 ⁶ 文化が自然の生命に似ているというのには、あくまでもものたとえであり、それも一面的なたとえにすぎないところがある。この説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 22

- ア 文化は動物や植物のような生命を持つ存在だという点で両者は似ているが、文化が変質するのに対し生命は変質しないので両者は異なりと筆者は考えている。
イ 自然は一定の地域的な差異や特性があることはまぬがれえないが、文化はそうではないため、お互いのたとえにはならないと筆者は考えている。
ウ 文化も生命も変化をしながら自己同一性を保っている点では共通性があるが、文化は後天的なものに類似しており、ふたつを同じと考えるのは危険だと筆者は考えている。
エ 生命は訓練や医療によってその肉体に変化を生じさせられるが、文化は根本的な変化を生じず両者を同一視することはできないと筆者は考えている。
オ 文化も生命も不変ではないが、自然の生命は人知を超えた存在でそこに人間が手を加えるべきではなく、その点で文化とは異なりと筆者は考えている。

問 9 筆者の考える文化について、本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 23、27

- ²³ 他国の文化と自国の文化の異質性を強調し、それが過剰になると、社会問題を文化論にすり替えることにつながり危険である。
²⁴ ひとつの文化が他文化の影響を受けたり完全な融合をみせたりする場合もあることを考えると、文化の原点主義という考え方は危険である。
²⁵ 文化論のひずみは、文化を生命のあるものだとして、他者とは区別される「個性のあるものだ」と考えるところに端を発している。
²⁶ ひとは怠惰であるため奇妙に精神を安らがせてくれる存在が必要であるが、そのよりどころとして文化論を持ち出してはいけない。
²⁷ 文化は民族の血と自然環境を栄養にして自然に育つものではなく、正しい努力によって変えなければならないこともある。

第三問 次の問いに答えなさい。

問 1 次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれ各群の A、E の中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 28、30

- ²⁸ 植物がハンモスする
ア 問題がハンゼンとしない
イ 意見にハンコンする
ウ 荷物をハンシュツする
エ パンダのハンシヨクにつとめる
- ²⁹ ゼンザンを受けた
ア 他社とキョウウザンする
イ 大企業のサンカに入る
ウ ヒザンな戦争を回避する
エ 事例がサンケンされる
- ³⁰ 行間にヒソヒ意図を読み取る
ア センバク免許を取得する
イ センニウ縄をもたない
ウ 一日センシユウの思い
エ センザイ能力を引き出す

文化論の第二の危険は、いわば決定論の危険であり、いかえれば文化の原点主義の危険である。長らく人類は、文化をたんなる副産物や一時的な規則と区別して、まるで動物や植物のような生命を持つ存在だと考えてきた。文化は決定的な原点となる種子から芽生えて、民族の血と自然環境を養って、一本の樹木のように育ってきたというイメージは、多くのひとにとってなじみ深いものだろう。日本文化についていえば、あるひとはその種子は弥生時代の農耕社会によって形成されたと考え、あるひとは縄文時代の照葉樹林のなかで育まれたと考えたりする。そして、いったん文化は血と肉を持つ生き物だと考えると、そういう存在は容易なことでは変えられないし、その一部を変えると全体が死んでしまうという、危機感にみちた固定観念を生みだしがらである。

Y 文化はあたかも自然の樹木のようにひとりでに育ち、種子のなかに用意された自己同一的な形成力を持つものだから、これは人間の意識的な加工の努力を超えているという、あきらめが生じるのは当然だろう。そして、このあきらめもまたある意味では、きわめて怠惰な精神の安楽さにつながっている。今日の難しい社会問題、なじみを変えたい文化に根ざっており、したがって人為の努力を超えていると思えば、当事者はその問題を横目で眺めて、手をつかなくて暮らすことができる。現に昨今、努力をすれば克服できるような政治や経済の問題が、「これは文化的な問題だ」と信じ込むことによって先送りされ、無意識のうちになおざりにされている場合が多いのである。

しかし、いうまでもなく、文化というものはその姿を仔細に見れば、けっして一本の樹木のように独立した実体でもなければ、種子の段階で運命的に固定された存在でもない。たしかに、文化は一定の土地で芽生え、一定の仲間をかたづくる人間によってつくられてきたものであり、そのかぎりにおいて、一定の地域的な差異と特長をまねがれない。だが、その反面、ひとつの文化が他文化の影響を受けるのはもより、ふたつが完全な融合をみせる場合もあり、他の土地に移ることによって根本的な変質をとげる場合もあることは、広く知られている。ひとつの民族が、その神話形成期にすでに他民族の宗教を受け容れたり、のちに民族全体が改宗することによって、他民族の神話のうえに自己の文化を接ぎ木してしまふような例もあった。

けだし、文化は土に根ざした生きものだからに事実だとしても、生命というものはけっして硬直した不変の存在ではない。もちろん、生命を持った個体はある一定の期間、ある一定の範囲で、変わらない自己同一性を保ちながら生きて行く。「私」という生物は昨日も今日も同じ「私」であり、生きていく限り変質と回復を繰り返しながら、基本的な同一性は持続する。死ぬというものは、その同一性と回復の可能性が破壊されて、肉体がもはや二度ともとに戻らない、一方向的な変化のなかで、崩れていくことだろう。しかし、そうはいわゆるもの、人間の一生のなかにも成長と老化があるだけでなく、訓練や医療によって、生命を持つ肉体がときに変わっていくことは、だれもが知っている。近代の科学の発展は、生命の一部を破壊しても新しい均衡が生まれ、必ずしその全体を殺すことにはならない、というさまざまな事例を発見している。それどころか、最近では生命の遺伝子を人為的に操作し、新しい生命の種子そのものを積極的につくろうという着想も、広く受け容れられているはずである。

そうえ、文化が自然の生命に似ているというのは、あくまでもものたどえであり、それも一面的なたどえにすぎない。文化は、けっして民族の生理的な特色にすぎないものでもなく、環境の自動的な影響の産物でもない。あくまでも、人間が日々積極的につくって、歴史のなかで身に備えた特性なのであって、もしたとせざるなら、生命そのものよりも、むしろ人間の後天的な習慣や癖に似ているといふべきだろう。たしかに、癖というものは簡単には変えられないし、人間の日々の行動は同一的な癖によって強く支配されているのは、事実だろう。しかし、その反面、われわれは、だれでも正しい努力をして知恵を働かすすれば、癖はかなりの程度に変えられるものだし、変えねばならない場合がある、ということを知っているはずである。

(山崎正和『日本文化と個人主義』)

注

*今日の経済摩擦や、つい近年までの世界戦争……この著書は一九〇年に出版されたものである。

*譯邊……はぼくにとって広がること。

*ここでもまた……これ以前の筆でも筆者は文化論のひずみについて、論じている。

問1 空欄 X にはいる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 15

ア 優越感 イ 闘争心 ウ 権威主義 エ 非寛容性 オ 自己顕示欲

問2 ① 過剰な特殊化 とあるが、一方で筆者は過剰ではない文化の特殊化もあげている。その箇所を本文中から三十五字で抜き出し、はじめとおわりの五字を記しなさい。解答番号は 16

問3 ② 人間性の悲しい弱さ、とあるが、それはどのようなことをいうのか、その内容として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 17

ア 個人も社会も、お互いが対立、抗争することによってしか、自分自身をつくりあげたり自己の存在を主張したりできないこと

イ 集団の中でしか自己の存在を見出すことができません、つねにどのような集団に属しているか考えて安心するところ

ウ 自己の存在、実質の自己とは何かという問題を、安易に、帰属する集団の特殊性をよじこらして答えとしてみようこと

エ 文化は特殊だとは限らないにも関わらず、特殊な集団に帰属していると安心していただけでその非特殊性に気づかないこと

オ 人は個人で独自の存在として生きていくことができません、集団のなかで他者との関わりを求めてしまうこと

問4 ③ 決定論 とあるが、これを端的に表した語を本文中から五字以内で抜き出し、記しなさい。解答番号は 18

問 3 20世紀システムとあるが、筆者は「20世紀システム」がどのような結果をもたらしたと述べているか、適切ではないものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 4

- ア 室内環境としての人工的な箱を次々と建設し、世界を覆いつくした
- イ コンクリートと鉄とガラスとによって、自然と人間とを分断した
- ウ 自然を薙り所にした空気や光を、人工的に調整できるようにした
- エ エネルギー消費と引き換えに、人間にとって完璧な室内環境を提供した
- オ 石油や原子力への依存を強め、地球環境のバランスを破綻に向かわせた

問 4 国立競技場とあるが、筆者は国立競技場をどのような空間を目指して設計したと述べているか、その説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 5

- ア 厳しい自然を人間がコントロールし安心して生活できる空間
- イ 石油や原子力エネルギーに全く頼ることなく暮らせる空間
- ウ 度重なる災害にも十分に耐え得る、安全性を確保できる空間
- エ 自然という厳しいものの中で、抗うことなく暮らせる空間
- オ 災害の多い日本においても、今後の持続可能性を制御できる空間

問 5 空欄 X にはいる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 6

- ア 脆弱な
- イ 古風な
- ウ 曖昧な
- エ 堅実な
- オ 簡素な

問 6 嘘の上に嘘を重ねなければならぬとあるが、これまでの建築思想に対し、これと同様の評価が読みとれる表現を本文中から十二字で抜き出し、記しなさい。解答番号は 7

- ア 外科室
- イ 破戒
- ウ 城の崎にて
- エ 刺青
- オ ふらんす物語

問 7 谷崎潤一郎の作品を次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 8

- ア 外科室
- イ 破戒
- ウ 城の崎にて
- エ 刺青
- オ ふらんす物語

問 8 人々と自然が庇でつながる とあるが、「庇によって実現される居空間」とはどのようなものか、二十五字以内で記しなさい。解答番号は 9

問 9 本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 10、14

- ⑩ 20世紀建築の大きなテーマは自然と建築をつなぐことだったが、21世紀の建築はこのテーマを否定することから始まる
- ⑪ 建築材としてのガラスは、それまでの石やレンガと異なり透明性を保持するため、視覚面では内外のつながりを実現できた
- ⑫ 20世紀システムはアメリカの発明であったため、日本の厳しい自然環境にそれをそのまま適用したところに破綻があった
- ⑬ 20世紀システムにおける限界を克服する新たな建築の設計に、コンピューターの助けを借りるのは、自然の力を享受しよりよする理念とは矛盾する
- ⑭ エネルギー消費によってではなく、日本の伝統的な自然観に立ち戻り快適な室内環境を構築することで、新たな建築の可能性がひらける

第二問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語句については、注を参照しなさい。

文化は、これまで国家や民族という観念と強く結びついてきた。そして、人間の歴史を振り返ってみると、不幸なことに国家や民族の自尊はつねに対立・抗争の意識とつながってきた。ひとつの社会のなかで、個人もまたお互いに争うことがあるが、とりわけ国家や民族は、お互いに争うことで自分自身をつくりあげてきた。その結果として、文化という特性はたの個人の特性以上に、とかく他者との比較・対立の観点から考えられがちになる。じつさい、今日の経済摩擦や、つい近年までの世界戦争の現実を振り返ってみても、ひとつが自国の文化、他国の文化をあげつらうときには、つねに何らかの意味の X が、国家主義的な自己主張の意識が伴っていた。そして、そういう X が、たとえ敗戦といった現実によって崩れたとき、今度は極端な自己卑下が社会に醸成するという事実、多くの日本人の記憶に新しいことだろう。

こうした事情からして、文化論には、二つの避けがたい危険な傾向が伴っているといわねばならない。その第一は、過剰な特殊化の危険である。文化を考える場合には、他民族、他国の文化と比較して考えがちであるので、どうしても両者の共通性よりは、ひとつの文化の異質性を強調して考えることになる。

(中略)

そうした特殊化は、個人が自分の存在や行動について振り返るとき、奇妙に気持ちをおぼろげにさせてくれる支えになる。自分とは何か、自己の実質は何かということ、もともとたいへん難しい問題であり、簡単には答えが出ないものであるが、ひとは生きるためにその答えを欲しがりがちである。そのさい、いはば心安易なやり方は、自分がどういう仲間にも属しているかを実感して、それを語ることで自己の中身を言い表わすことだろう。そして、自分がどういう仲間にも属しているかを振返るとき、その仲間の範囲が狭く、他の集団と対立していればいるほど、自分自身の世界のなかにおける位置は明確になる。ここでもまた、文化論のひずみというものは、人間性の悲しい弱さに深く根ざしているといえそうである。

第一問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

建築の内と外をつなぐというのは、20世紀建築の大きなテーマであった。石やレンガを積んで厚い壁の建築を作るやり方から、コンクリート、鉄柱、大判のガラスを組み合わせて作る開かれた建築への転換が、20世紀初頭に起こった。ガラスを多用した、その透明な建築スタイルは、モダニズム建築と呼ばれ、人々を熱狂させた。建築家も建設業界もガラスの箱の大キャンペーンを開始したのである。人間はガラスによって再び自然とつながったと、狂喜したのである。

(中略)

その大きなガラスは、本当に内と外をつないでいたのだろうか。視覚的には、内と外はつながっていて、ガラスの箱の中からも、外の景色を眺めることができた。外を歩く人々も、内へ何が起きているか、大体察することはできた。

B

実のところ、内と外は、少しもつながって、いなかった。モダニズム建築によって、このガラスの箱によって、自然と人間とは決定的に切断された。内部の環境、すなわち室内環境は、膨大なエネルギーを消費する空調システムによってしか、制御できなかったからである。その空調機を廻し続け、その箱の中の照明器具をともし続けるために、石油を垂れ流し続ける必要がある、安全性も不確かな原子炉を廻し続ける必要があったのである。そのガラスの箱は郊外を通過するために発明された自動車という道具も、石油の垂れ流しに支えられ、走り廻っていた。それが、20世紀という時代の正体であり、ガラスの箱の正体だったのである。

C

アメリカで発明されたこのシステムは、あつという間に世界に伝播し、第二次大戦後の日本は、そのシステムを最先事に学習した。日本は20世紀システムの優等生であった。このシステムの破綻を、決定的な形で入々につきつけたのは、2011年3月11日の、東日本大震災であった。20世紀の人類が築き上げてきたシステムが、いかにもよく、いかにも儼然であったが、大地震と津波とが、われわれに教えてくれた。最高の

A

優等生が、最ももろかったというのは、歴史の皮肉とも、必然とも感じられる。20世紀の人類は、コンクリートと鉄とガラスを使って、人工的な箱を次々と建設し、増殖させ、世界を覆いつくした。このガラスの箱は、工業技術の力によって万全な強度を持ち、人工的な空調システム、給排水システム、照明システムによって、人間に完璧な環境を提供する――完璧な箱であると、人々は確信し、うぬぼれていたのである。しかし、自然という大きなリアリティの前では、このガラスの箱は何物でもなかった。この箱を支えていたはずの原子力のシステムも、大きな波に流れ流されて機能を失い、機能を失っただけではなく、放射能を周囲に撒き散らした。20世紀というシステム、工業化社会というシステムが、そしてその象徴であったコンクリートとガラスと鉄でできた箱が、いかに傲慢で無力であったかを、われわれに、つきつけた。

2020年のオリンピックの会場となる国立競技場は、3・11がつきつけたものをしっかりと受け止め、反映したものにしななければならない。ガラスによって内と外をつなぐというのは、そのシステムで利益を得ているインフラ産業、建設産業が考え出した工業化社会のフィクションである。ガラスによって、内と外とを区画するのではなく、大きな底を張り出すことによって、涼しい風を通る、気持ちのいい内部を作り出すと、僕らは考えた。庇によって守られたその場所は、もはや内部と呼ぶ必要もない。それは内部でも外部でもなく、ただ人間という弱い生き物が、自然というとても大きくて厳しいものの中で、だまされ、なんどかギリギリ暮らしていくことのできる、ささやかな場所なのである。

そもそも、そのような考え方、そのような自然観に基づいて、日本の建築物は作られてきた。たゞ重なる地震、災害が、自然というものの大きさ、強さ、そして人間というものの弱さ、はかなさを日本人に叩きこんできた。だから、日本人は、閉じた箱を作ろうとせず、庇や縁側といった X 装置を使って、自然に開きながら、自然の美しさを身体で感じながら、自分達のささやかな場所を確保してきたのである。

2020年の国立競技場のデザインのベースになっているのは、この日本の知恵、諦め、謙虚さである。大きな底を重ねることで、弱い人間を守るといえるのが、新しい国立競技場のデザインの基本的な発想である。箱に閉じ込めて、人間を守ろうとする、その箱の環境を維持するために、さらなる人工的なシステム(たとえば空調、照明)を構築しなければならず、そのシステムを維持するために、莫大なエネルギーが必要となる。無理なシステムの上にさらなる無理なシステムを重ねなければならず、嘘の上に嘘を重ねなければならない。その結果、地球という繊細な場所、繊細なバランスは破綻してしまう。

(中略)

今回の競技場のような大きくて複雑な建築となると、その計算の複雑さは半端ではなくなる。コンピューターの助けを借りて、風と光を計算した。また、大屋根の一部を透明にして、太陽の光を上手に採り入れて、芝生を育て、観客席を明るくしようとした。屋根のどの部分を透明にするかを決めるのに、コンピューターの御世話になった。20世紀的な空調システム、照明システムに頼らずに、気持ちのいい人間の居場所を作ろうとするならば、コンピューターと一緒に、細かな計算、細かな配慮を積み重ねていかなければならない。

その大きな底の重なりの下には、様々な気持ちのいい陰が生まれる。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』(1939、創元社)は、陰のことなぞ考えたこともなかったモダニズム建築家達に大きなショックを与えたが、国立競技場は、『陰や美しさ、陰の快適さが感じられる場所である。』

(中略)

スタジアムは、スポーツイベントのためだけの建築であってはならない。スタジアムは、いつも僕らと一緒にあって、いつでも僕らと会話できる場所であればならない。そのために、樹をたくさん植え、雨水を集めてせせらぎを流し、スポーツ競技が行われていない日も、このスタジアムと僕らは、いつもつながっている。ガラスによってつながるのではなく、庇によってつながっている。

21世紀とは、人々が庇でつながる時代である。人々と自然が庇でつながる時代である。様々な自然、様々な場所、様々な人々とが、様々な仕方につながる時代である。

(隈研吾『心との住処 1964-2020』)

問1 a・bの読みをひらがなで記しなさい。解答番号は a 1 b 2

- 1 破綻 a 2 儼然 b

問2 空欄 A から C にはいる語の順序として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 3

- A A 一見 ー B しかし ー C やはり
- I A 確かに ー B しかし ー C むしろ
- ウ A 一見 ー B むしろ ー C つまり
- E A 確かに ー B しかし ー C すなわち
- オ A 確かに ー B むしろ ー C ただ